

吉

野

川

お

散

歩

紀

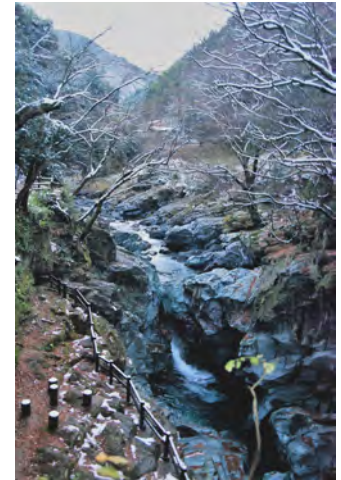
行



廃校をリノベーションしたカフェ
三好市ハシとケ珈琲



吉野川と祖谷川が出会う場所



凩としたたはずまい 冬の土釜



「世界とつながるのは、英語じゃない
徹底的にローカルを極めること」
にし阿波と世界をつなぐ
つるぎ町地域おこし協力隊
榮 高志さん

白く美しいにし阿波あったか散歩道 ～三好市からつるぎ町へ～

「剣山系の山の文化と吉野川の流域文化は深いつながりを持っています」と、つるぎ町地域おこし協力隊 榮高志さんは言う。

霊峰剣山を源とするのは、四国一の清流といわれる吉野川の支流穴吹川。この穴吹川だけでなく、祖谷川、貞光川も吉野川へ流れ込む。折り重なるように連なる山々から、雫が大河となり、流域の歴史を作ってきた。池田からは、東へ一直線に流れる吉野川。平田船がゆきかい、池田や脇町などは荷を積み下ろしする川湊として栄えた。木炭や薪、藍、煙草などが下流へ、下流からは、米や肥料などが運ばれた。

平成25年4月1日、美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町をエリアとする『にし阿波』は、中四国で唯一国土交通省の観光圏実施制度により『にし阿波～剣山・吉野川観光圏』として認定を受け、独自ブランドとしての魅力の発信に力を注いでいる。白い雪が川面を染める冬の日、にし阿波を中心として様々な地域活性化プログラムに関わる榮 高志さんに冬の吉野川からはじまるストーリーを案内していただいた。

※観光圏とは 自然・歴史・文化等において 密接な関係にある区域が連携し、観光客が滞在・周遊できる魅力ある観光地域作りを促進するもの。

温かい珈琲から始まる冬の 出合(出会い)の旅

三好市池田町の旧出合小学校跡を利用したハレとケデザイン舎。その中にあるハレとケ珈琲。学校の雰囲気そのまま残した趣きでゆったりと時間が流れる。

吉野川水系の河川・松尾川。ハレとケデザイン舎すぐそばからの眺め。



株式会社ハレとケデザイン舎
代表 植本修子さん

まずは吉野川の上流域三好市池田町へ。廃校となった^{であい}出合小学校を活用したのがハレとケデザイン舎だ。その中にあるハレとケ珈琲。吉野川や吉野川水系の祖谷川、松尾川を眺めながら雪も降り始めた山道を^{さん}案内してもらい到着した。

ここで使われている生活水のすべてが出合の湧き水。水道水は一切利用していない。

ここを新しい生活の場所として選び、生まれ変わらせたのが植本修子さんだ。東京でデザインの仕事をしていた中で、廃校活用のアイデア



まるで絵を眺めているような景色が広がる

を募集していることを、会社の上司を通じて知った。直感的に「面白そう」と感じ、引き寄せられるように三好市を訪問。

もともと古いものが好きだった。空の色、川のせせらぎ、鳥の声・・・旧出合小学校を訪れた時に宝の山だと感じた。「子育てにもいいと感じました」と植本さん。移住は2014年。初回訪問から5ヶ月で移住を実行。東京でマンションを購入したばかりだったが「何とかなる」と即決。デザインオフィスだけでなく、カフェ、ゲストハウスなど事業は多岐にわたる。出合小学校が廃校してから9年の時を経て、新しい形での出発。はじめに「復活祭」も企画し、数多くの地域の方々と旧出合小学校の復活を祝った。松尾川を利用した川遊びの企画も実施。これからも地域の魅力を活かした活動が続いていく。

出合の湧き水だけにしかできない珈琲の味

愛媛県新居浜市出身の青木陽平さん。出合の湧き水は、まろやかさがある中に少しの硬さもあることに驚いたそうだ。別の湧き水では違う味になってしまう。出合の湧き水を使ったこだわりの珈琲が今日もい



にし阿波の傾斜地農耕システム 世界農業遺産登録を目指して

つるぎ町

さるかい
猿飼集落

足を踏ん張っていないと、はるか眼下の貞光川に転がり落ちてしまいそうな急傾斜地。まるで、空から川を見下ろしているようだ。徳島県西部にし阿波の山間部は、場所によっては、斜度40度にもなる急傾斜地で段々畑のような水平面を作らず、傾斜地のまま農耕している。2017年3月、つるぎ町猿飼集落を含むにし阿波の急傾斜地は、国連食糧農業機関(FAO)が世界的に重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域(農林水産システム)を認定する世界農業遺産の候補地となった。中四国で初めての候補地となり、多くのマスメディアに取り上げられている。また、同時に日本の農業遺産にも認定された。

現在、今年春の認定に向けて世界農業遺産認定への気運が盛り上がっているにし阿波。

榮さんがつるぎ町を案内する時に、必ず訪れるのが、シンボリック存在のここ猿飼集落だ。「これが、大切なんですよ」と榮さんが言うのがコエグロ(肥束)だ。ススキを乾燥させたカヤを畑にすき込むことで、山間部の強い風雨による土の流出を防いだり、畑の保湿や微生物の繁殖にも役立っている。また、等高線に沿った畝^{うね}たてを行い、貯水と排水を調節している。

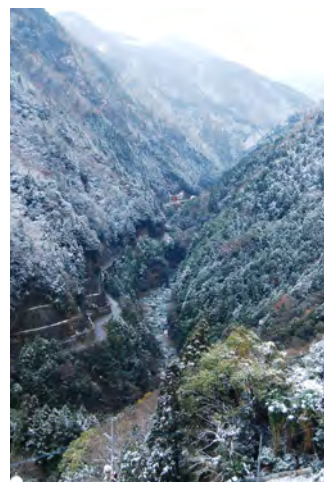
また、この山の栄養分は、貞光川から吉野川、海へと流れ込み、海の生き物たちの栄養となり、また下流の肥沃な土壌となる。この



急傾斜地に点在するコエグロ(肥束)。急傾斜地の農業にはかかせない。

ような厳しい環境で作られるのは、そばや粟、稗などの雑穀や野菜であり、複合的な農業がずっと行われてきた。この猿飼地区で作られているそばは、きゅっとしまった小粒の実で他にはないものだと言います。つるぎ町でも雑穀のブランド化が進められており、日本、世界へつるぎの雑穀の魅力を発信している。ここに来たツアーのお客様には、猿飼で収穫したそば米雑炊がふるまわれる。

ここには、派手さはまったくない。大量生産、大量消費からかけはなれ、厳しい自然と向き合い、畑を耕してきた人々が、どう生きてきたかを知ることができる。連綿と続く人々の暮らしの営みがここにある。今、そこに価値を見出す人が日本全国そして、世界中から訪れている。



眼下に貞光川。山の水と川の水はつながっている。



にし阿波世界農業遺産についてはこちらから。



貞光川沿いの旅

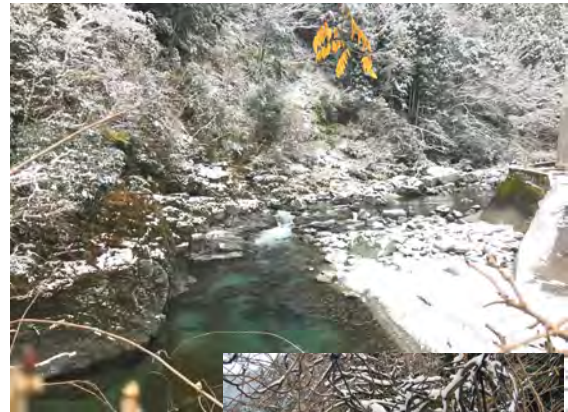
つるぎ町一宇

吉野川にかかわる水の旅。普段見ることのない雪の貞光川が一宇から吉野川に流れ込むまでのルートに沿って、榮さんに車で案内してもらった。時には車を降りて川を眺める。川沿いの山々や川面にしんと雪が降り続く。冬の貞光川は、清冽で心が引き締まり、趣深い。「この橋は、フジの季節は、本当にきれいですよ」と榮さんが教えてくれたのは、つるぎの宿岩戸近くの貞光川にかかる橋。誰もが貞光川を身近に感じられる場所だ。

県の天然記念物青石が川の流れによって侵食された奇勝土釜や、県下随一の85mの長さ^{なるたき}を誇る三段滝の鳴滝など名所も多い。水の流れている滝から少し離れた場所には、鳴滝大明神、不動明王が神仏ともに祀られている。このように、にし阿波の山間部では、



鳴滝。これは、2段目の滝。



つるぎの宿岩戸近くの貞光川と橋。フジの季節にも来てみたい。



今も神仏習合の信仰が色濃く残り、自然を敬い共生する暮らしが伝えられている。

このような冬の白い山々と川の姿。春には梅が咲き、その後フジが咲く。夏になれば、子どもたちが貞光川で泳いで歓声をあげる。秋には、川面に紅葉が舞い落ちる。時には、星を見上げる。榮さんは、この自然の中で暮らすことに幸せを感じるという。

温かい珈琲から始まる冬の出合(出会い)の旅は、厳しい自然に向き合いつつも、どこかあたたかい旅だった。



ハレとケ珈琲

鳴滝、土釜、つるぎ町猿飼集落についても地図上に表示

〒779-5164 徳島県三好市池田町大利大西15 旧出合小学校

TEL: 0883-75-2208

営業時間(月・火・木・金)

11:00~17:00

(土・日・祝)

11:00~18:00

定休日: 水曜日

ハレとケ珈琲HP



ここに暮らす

ここに生きる

雪が降り積もる、つるぎ町一宇の赤松集落。集落の一番上にある民家から一番下に位置する集落の高低差は約500m。昔ながらの傾斜地を利用した農耕システムが継続されている。

つるぎ町地域おこし協力隊

さかえ

榮 高志さん

直感でつるぎ町で住むこと
になると感じた



つるぎ町のことを知ったのは2015年9月。東京・浅草で、にし阿波の世界農業遺産に向けての取組みを説明する講演会に参加したことがきっかけだった。この中で具体的な町名がでていたのが「つるぎ町」だった。当時、社会起業大学に通い、社会の問題をビジネスで解決することを学んでいた。にし阿波の取組みは、持続可能な社会の実現に向けて、日本から世界に発信できる可能性があると感じ銘を受けた。講演会の翌日には、つるぎ町役場に現場を見せてほしいと、問合せの電話をしていた。ちょうど、地域おこし協力隊の募集があり、訪れた時に履歴書を渡した。初めて訪れた時には、直感で「ここで住むだろうな」と感じた。2ヶ月もたたない2015年11月から地域おこし協力隊に着任。徳島は縁もゆかりもないところだったが、何も迷いはなかった。

多くの人々に日本の良さを伝えていきたいという根本的なところはずっと変わらない。高校卒業後、大阪を飛び出し、アメリカに留学し、カリフォルニアで演劇を学んだ。海外で暮らすことにより「日本の文化・歴史の素晴らしさ」を深く知る機会となった。人々に表現し伝えたいと、13年間俳優業をしていた。その後、2011年に発生した東日本大震災で、自分の無力さを感じた。

「ここでやりたい」と思えるような現場と

出会い、何か人の役に立つことをやりたいと
思っていた。

もともと歴史や民俗学などに興味があり、現代の暮らしは、先人たちが培った上に成り立っていることを感じていた。町内には、巨樹、日本神話の伝説が残る神社、神仏習合のなごりなど、日本の原点を感じることができる場所が数多くあるという。観光客から質問をされ、わからないことがあれば、地元の人に聞くだけでなく、町史、村史を読み込み、奥深い説明ができるように学んだ。日本人だけではなく、ナショナルジオグラフィックツアーに同行し、世界中のお客様を案内している。世界農業遺産登録に向けての活動を、応援してくれようとする海外のお客様も多い。「つるぎ町の魅力を説明するには何時間もかかりますよ。語り尽くせません」と話す榮さん。

今年の春には会社を起業し、にし阿波の集落巡りツアー等の企画に、取り組んでいくことが決まっている。会社名「AWA-RE」（あはれ）は、「古事記伝」を執筆した本居宣長が重視した平安時代からあることばだ。深いしみじみとした感動、情緒といった意味がある。AWA（あわ）RE（再生、再び）等の意味も込めて名付けた。これからもつるぎ町で暮らし、にし阿波の魅力、情緒を伝える活動が続く。